

# ニーチェを読むシモンズ

## ——永劫回帰とデカダント的欲望の間

庄子ひとみ

### 1. はじめに

アーサー・シモンズ (Arthur Symons: 1865–1945) が編集長を務めた文芸雑誌 *The Savoy* (Jan. ~ Dec. 1896) が果たした文学的貢献の一つに、英語圏の読者に初めて本格的にドイツの哲学者ニーチェ (Friedrich Nietzsche: 1844–1900) 作品を紹介したことが挙げられる。ニーチェは Bridgwater が *Nietzsche in Anglosaxony* (1972) で論じているように、20 世紀以降の英米モダニズム文学に多大な影響を与えた存在であり、1890 年代に刊行された *The Savoy* はその足がかりを作った雑誌と言える。

本稿では編集者としてだけでなく熱心なニーチェ読者としてのシモンズに光をあて、ニーチェの『ツァラトゥストラはこう言った』(独 *Also sprach Zarathustra*; 英 *Thus spake Zarathustra* 1883–5) で語られる永劫回帰 (Ewig Wiederkehren; Eternal Recurrence) とニヒリズム (Nihilismus; Nihilism) の解釈に注目し考察する。シモンズは文学史においてヴィクトリア朝世紀末の退廃派詩人 (Decadent Poet) と分類されていることが多く、詩を中心に世紀末独特の倦怠感や退廃的な主題を扱っている点から、この分類は無難で妥当であると言えよう。しかし一方で、ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer: 1788–1860) のエッセイ「自殺について」(‘On Suicide’) の英訳が 1890 年に発表された影響もあり、1890 年代の英国で認められた芸術至上の傾向を持つ者の自殺への強い関心、Stokes がいうところの ‘Suicide Craze’ (115) という流行を支えたヴィクトリア朝世紀末の唯美主

義者でありデカダントの典型と、文学的な分類で同集団に属するはずのシモンズ作品から伝わるメッセージ性は一致しない印象がある。シモンズの作品を語る上で常に感じていたこの違和感を解明する鍵としてニーチェの永劫回帰論とシモンズの人生観の類似性に注目し、考察する。

## 2. *The Savoy* による英語圏へのニーチェ紹介と永劫回帰論

独語原文を読むことのできる文筆家がニーチェについて英語で言及している記録は 1890 年代初頭に既に見出せる。最も早いものはおそらくスコットランドの詩人ジョン・デイヴィッドソン (John Davidson: 1857–1909) による *The Speaker* (28 November 1891) の批評で、マックス・ノルダウ (Max Nordau: 1849–1923) も *Degeneration* (1895) の ‘Ego-Mania’ の章でニーチェについて言及している。しかしながら、ニーチェ作品の英訳本が未刊行の当時、これらの先駆的な言及は英国で大きな話題にならなかった。英国におけるニーチェ受容という観点から見ると、やはり「より重要な年は 1896 年であり、英語圏の読者を短期間で一気に広い層に拡大したという意味でも雑誌 *The Savoy* の 3 号続けての連載による貢献は大きい」(Bridgwater 12)。

1896 年 4 月号の *The Savoy* にハヴロック・エリス (Havelock Ellis: 1859–1939) による連載 ‘Friedrich Nietzsche’ 第一回が掲載された。「熱心なニーチェ礼賛者でも反ニーチェでもない立場で執筆するために、この連載を引き受けた」とした上で、ニーチェの著作について「ドイツではすでに苛烈な反応が起きており、これからはじめて完全な英語版が刊行される英国においても同様の状況になるだろう」(Ellis 79) と予告している。実際に Alexander Tille と Herbert Croly による初の本格的な英訳 *The Collected Works of Friedrich Nietzsche* (1896) はロンドンの マクミラン社から刊行された。

英国の定期刊行物でニーチェの著作について言及する記事の数は 1896 年を境に増えているが、ニーチェへの「強い共感」あるいは「強い否定」と読者の間で両極に評価が分かれる点は当時の時代背景を鑑みて想像に難

くない。例えば『ツァラトゥストラはこう言った』において、人は生まれ変わったとしても、今よりも悪い人生でも、より良い人生でもなく、全く同じ人生をひたすら永遠に繰り返すしかない (*Zarathustra* 196) と語るニーチェの永劫回帰論は、Bowlby が指摘しているようにヴィクトリア朝の英国を席卷した優性個体が存続するための生物の自然淘汰という変化を認めたダーウィニズムと相いれないし、「超人」であるツァラトゥストラに冒頭で「神は死んだ」と明言させるニーチェの言葉も神の存在を否定することで敬虔なキリスト教徒を挑発するものと受け止められても仕方ない (229)。宗教の種類に関わらず輪廻転生を信じている限り、我々は目の前の人生を終えた先には天国、あるいは極楽浄土——どんな名称で呼ぶのであれ、より明るい光を、何かしらの救済を期待したくなるものではないだろうか。現実で耐え難い苦難や絶望に接しているのなら尚更、今よりも素晴らしい来世を期待したくなるものだ。しかしニーチェの『ツァラトゥストラ』によると、何度生まれ変わっても輪廻転生の先に変化は起こらない。我々人間が地上に現れて以来、この生命のサイクルは意味もなく延々と同じことが繰り返されるだけである (*Zarathustra* 196)。このニーチェ独特の永劫回帰論は究極に虚無的な思想、ニヒリズムと現在も分類されている。

一般に哲学書と捉えられているけれども『ツァラトゥストラ』は偉大な人物の道程を辿る叙事詩あるいは寓話のような文体で書かれ、神の死んだ世界に現れた「超人」である主人公の名前はゾロアスター教始祖のドイツ語表記と同一であるものの、その教義を伝達する内容とは言えず全くの独自性を有している。主人公にツァラトゥストラという名前が与えられている一方で、彼が道中で出会うものたち (人間以外の生物も含む) はそれぞれ、まるで一枚のカードの中に相反する意味が潜むタロットカードのように道化師、隠遁者、学者等、その概念を象徴する役割としてのみ現れ、固有の名前は与えられていない。彼らとの対話やツァラトゥストラ自身の独白や自問自答を読み進め、読者も出会う言葉に常に陰陽のように相反する意味が同時存在することを提示されながら、自分が見出した解釈と対峙せ

よと迫られるようでもある。

ツァラトゥストラは永遠に続くかのような暗闇を通り抜けた先の光を目指し洞窟を抜けたが、そこに新しい世界は拓けておらず、また振り出しに戻ってしまっただけだった。今生きているこの人生、前世、それよりももっと前にも生きてきた人生は未来永劫くり返すだけで、苦悩も快楽も嘆きも、全てが変化することなく巡り再来する。その円環に属している自分を悟った時に、去来する感情はどういうものだろう。何をしても無駄なのだという恐ろしい虚無感に襲われるのではないか。しかし、超人であるツァラトゥストラは、その絶望と虚無感の最中でこう叫ぶ。

I come again, with this sun, with this earth, with this Eagle, with this Serpent — not to a new life, or to a better life, or to a similar life — I come again eternally to this self-same life, in greatest things and in least, that I may teach again the Eternal Recurrence of all things. (Zarathustra 196)

「わたしはふたたび来る。この太陽、この大地、この鷲、この蛇とともに。—— 新しい人生、もしくはより良い人生、もしくは似た人生に戻ってくるのではない。わたしは永遠にくりかえして、細大漏らさず、そっくりそのままの人生に戻ってくるのだ。くりかえし一切の事物の永遠回帰を教えるために」(『ツァラトゥストラ下』氷上訳: 337)

何の変化もなく永遠に繰り返される人生の円環に属していることの衝撃と虚無感と何度でもその瞬間をくりかえして見せるという力強い意志が共存しているこの場面は、生きることに自暴自棄になる消極的なニヒリズムでもなければ、あらゆる干渉から離れ静かな悟りの境地に至るような種類でもない。虚無的だが同時に能動的な意志があり、ニーチェのニヒリズムを解釈する上で現在も多様な解釈がなされているのも理解できる。そして、このニーチェのテキストには、ヴィクトリア朝世紀末のデカダント詩人とされているシモンズ作品を解釈する際に言語化が難しいと考えていた違和

感を説明する特徴やメッセージ性を共通項として見出すことができるのである。

### 3. 「美しく死ぬ」：世紀末のデカダント的欲望

ヴィクトリア朝世紀末の文学・芸術動向を特徴づけるキーワードに唯美主義 (Aestheticism) や退廃派 (Decadence) が挙げられる。道徳的に逸脱した主題であっても、そこに美を見出せるなら、芸術の一形態として礼賛されるべきであるという美学は時に極端な方向へと分岐した。Stokes が例を挙げているように、文学や芸術作品以外でもメディアが自殺を美化して取り上げる傾向はこの時代に目立っており、唯美的な自殺「美しく死ぬ」(doing it beautifully) ためにはどうすれば良いのかという衝動について特集まで組まれている (123)。例えば 1895 年 4 月 2 日付の *Pall Mall Gazette* では 3 名の自殺者について報道されているが、上品な身なりをした紳士が剃刀で自らの首を切りハムステッドヒースに倒れ、同じ日にウエストミンスター・ブリッジから身投げをしたのは有名弁護士と離婚したばかりの夫人であった、など単なる訃報ではなくその自殺に至った人物の背景を、まるでミレーの絵画の自殺したオフィーリアの入水死体のように、悲劇的にかつドラマティックに脚色して見せる意図が透けて見える。1890 年代はメディアも自殺をタブーとして扱わず、脚色し美化するだけではなく、1895 年 9 月 5 日の *Reynolds's Newspaper* では「自殺の季節」‘The Suicide Season’ というセンセーショナルな見出しをつけて茶化するような記事 (Stokes 140) さえ見られる。

1893 年 8 月 25 日号の *Pall Mall Gazette* 紙ではオスカー・ワイルド (Oscar Wilde) をやや彷彿とさせる人物が唯美主義的な衣装で片手にデイリー・クロニクル紙を持って虚な表情で佇む風刺画が掲載され、まるでトイレの場所を案内するようなサインの横には「死に至る部屋はこちら」(‘To the lethal chamber’) という表示と「休日のお楽しみ：生きるべきか死ぬべきか」(Amusement for the Holidays: To be, or Not to be?) という言葉が添

えられている。

1890年代の唯美主義者でありデカダントの作家として、ワイルドはシモンズとともに筆頭に上がる作家の一人である。Stokesはワイルドが死を芸術家の人生を彩る演出の一つとして捉えていた一方で、シモンズは自殺の解釈についてワイルドと対照的であると指摘しており(137)、筆者もこの指摘について同感である。シモンズは自殺願望や破滅的な早すぎる死への衝動に囚われた同時代の作家仲間を直接否定することはなく、むしろ失恋と貧困の後に早過ぎた死を迎えたダウスン(Ernest Dowson: 1867-1900)など、自殺した家族を抱え夭逝した詩人仲間の死を悼み再評価に向けた評論なども積極的に執筆している。一方で、メディアが時に面白おかしく自殺を取り上げている時代にあっても、人間が生物学的に死亡するというのがどうということなのかを「死を恐れよ」と訴えるかのよう詩で発表しており、この態度は死をも美化する同時代のデカダント詩人たちとは明確に異なる。ハムレットのオフィーリアのように若く美しかった娘であっても、現実死因が溺死であれば、肺に水が入り沈んだ後にガスとともに膨れ上がり浮かび上がってくるわけで、ミレーの絵画のように美を保ったまま水面に漂うはずがない。自殺にまつわるメディアの報道や周囲の喧騒に意義を申し立てるように、シモンズは、自分が感じている現実的な死への恐怖と死体から受けた印象をストレートに書いている。

‘At the Morgue’ (1894)

I am afraid of death to-day,  
For I have seen the dead  
Where, in the Morgue, they lie in bed,  
And one dead man was laughing as he lay.

And that still laughter seemed to tell  
With its inaudible breath,

Of some ridiculous subterfuge of death,  
Some afterthought of heaven or hell.

今日、わたしは死が怖い  
死体を見てしまったから。  
遺体安置所に並べられた死体  
ある死体は笑っているように見えた。

静止した笑いは 聞き取れないほど微かな息で  
何かを語ろうとしているみたいだ。  
その死を何とか誤魔化そうとしているのか  
向かうのは天国か地獄か 今となっては後の祭り。  
(Symons 'Knave of Hearts' 36)

破滅的な死の衝動へ突き進んだ仲間の感性や才能は認め、否定もしないが、自分自身は「わたしは死が怖い」と明言し、死を美化することもしていない。シモンズは同時代のデカダント詩人や作家たちの一部が有していた「死への衝動」と、自分に与えられた人生、死生観の狭間でどのようなスタンスだったのだろうか。そしてニーチェの言葉は 'I never take up Nietzsche without the surprise of finding something familiar' 「ニーチェを読むときは常に、自分でも驚くくらい親近感を覚えてしまう」(Symons, 'Nietzsche' 9) とニーチェ作品への強い共感を示したシモンズにどのように響いたのだろうか。

#### 4. 繰り返される人生の輪、永劫回帰への共感

上述の通り、世紀末デカダントの特徴の一つとして「死への衝動、あるいは美化」が挙げられるが、シモンズの詩作品を中心に読み直してみると、ミュージック・ホールの踊り子との刹那的な恋や失恋、説明し難い不安で眠れない不眠症の夜、ハシシの煙と幻覚など、退廃的とされるモチーフを積極的に扱い、都会で生きる繊細な人物の絶望をも繰り返し描きながら、

その結末としての自殺を美化し礼賛するような作品は見当たらない。むしろ、シモンズの作品を読んで感じるのは、繰り返される絶望や焦燥感と共に、それらを手放さず、過去から未来へと未来永劫続いていく壮大な人生の輪に参加している自身を見つめ、それでも生きる意志と覚悟なのである。それは太陽のように明るく楽観的な人生の肯定ではなく、強烈な光の背後にある影をも含めて眺め、抱擁する態度である。ニーチェが「いままさにわたしの世界は完全になった。真夜中はまた正午なのだ。苦痛はまたよるこびであり、呪いはまた祝福であり、夜はまた太陽なのだ。去る者は去るがいい！ そうでないものは学ぶがいい。賢者はまた愚者だということを。」(『ツァラトゥストラ下』 氷上訳: 299) と書いたように。

シモンズの作品で、未来永劫続く人生の輪と光と影、この視点が生かされている詩の一つが ‘Modern Beauty’ である。

‘Modern Beauty’ (1899)

I Am the torch, she saith, and what to me  
 If the moth dies of me? I am the flame  
 Of Beauty, and I burn that all may see  
 Beauty, and I have neither joy nor shame,  
 But live with that clear life of perfect fire  
 Which is to men the death of their desire.  
 私は灯火、と彼女は言った。何だというの  
 私のせいで蛾が死んだからといって。私は美の炎  
 美を見出す者全てを焼き尽くす  
 喜びも恥もない  
 完全なる火炎として生きる者  
 男たちの欲望に死をもたらす炎として。

I am Yseult and Helen, I have seen  
 Troy burn, and the most loving knight lie dead.  
 The world has been my mirror, time has been



My breath upon the glass; and men have said,  
 Age after age, in rapture and despair,  
 Love's poor few words, before mine image there.  
 私はイゾルデでありヘレン 目にしたのは  
 トロイの炎上 横たわるのは最も愛した騎士の亡骸。  
 世界は私の鏡 時はグラスにかかる吐息。幾年も幾年も  
 恍惚と絶望の中 男たちは語る  
 私の姿を前に 哀れな者に愛の言葉を僅かばかり。

I live, and am immortal; in my eyes  
 The sorrow of the world, and on my lips  
 The joy of life, mingle to make me wise;  
 Yet now the day is darkened with eclipse:  
 Who is there still lives for beauty. Still am I  
 The torch, but where's the moth that still dares die?  
 私は生ける不死の存在。この目で見つめてきたものは  
 世界の悲しみ。この唇で味わったものは  
 生の歓び。全てが混ざり合い私を賢くさせる。  
 日蝕の時 闇に覆われた今  
 美のために生きる者など何処にしよう。今でも私は  
 灯火なのか でもその炎に灼かれようという蛾は  
 何処にいるの。(Symons 'Modern' 82)

Bell が指摘しているように、パウンド (Ezra Pound: 1885–1972) に代表される 20 世紀モダニズムの作家はニーチェの影響を受けて神話をモチーフにしながら現代の様相を描くという手法を発展させたが (19)、この 'Modern Beauty' はヴィクトリア朝世紀末詩人であるシモンズが既にその手法を採用している例と見ることができる。ファム・ファタール的な魅力で男性たちを虜にした同時代の女性を主題にしているのは間違いなさそうだが、そのモデルとしてシモンズと交際したものの最終的に彼の元を去り裕福な男性の元へと嫁いだミュージック・ホールの踊り子リディアか、ある

いは Schneider の指摘にある通り (52) 高級娼婦を語り手と想定して書かれたものなのかは不明である。しかし、少なくとも確かなことは、ヴィクトリア朝世紀末という特定の時代に生きた個人の経験を悠久の時間軸で捉え、普遍性をもって崇高な存在へと高めている点で、Schneider もこれはシモンズ詩の傑作の一つと捉えている。1 行目は「彼女」‘She’ だった主語を「私」‘I’ にすることで、シモンズがこの女性の立場になって憑依し、彼女の人生を壮大な時間軸の中で回想している感覚になるが、「私はイゾルデでありヘレン」と語る姿は、ニーチェが 1889 年 1 月 3 日のコージマ・ヴァーグナーに宛てた書簡の中で「私は人間の体験することのできる最低のものから最高のものまで全て知っています。インド人のあいだでは仏陀でしたし、ギリシアではディオニュソスでした。アレクサンダーとシーザーは私の化身で、詩人ではシェイクスピアでした…」(『ニーチェ書簡』塚越・中島訳 282-3) と延々と綴る姿とも重なる。

自分自身も他人の人生も全て、この世に人間という存在がいる限り永遠と続く人生の円環について、シモンズもまたニーチェと同様に、変化なく未来永劫続く「全く同じ繰り返し」の永劫回帰論を認めているのではないだろうか。例えば、デカダント詩人としてのシモンズの評価を不動のものにした詩集 *London Nights* (1895, 2<sup>nd</sup> ed.1899) は、舞台の幕が上がるかのように、詩 ‘Prologue: Before the Curtain’ から始まる。この詩において、ロンドンという雑多な人々が集う大都市で生きる人々を ‘We are the puppets of a shadow-play’ と自身を含めて舞台に順番に呼ばれる演者に準えている。我々は人生という舞台で与えられた「全く同じ役割」(Passionately we play the self-same parts) を熱心に延々と演じ続け、役割が終わればその舞台から去っていき目の前の観客から忘れ去られていく様相を描いている。

We are the puppets of a shadow-play,  
We dream the plot is woven of our hearts,  
Passionately we play the self-same parts

Our fathers have played passionately yesterday,  
And our sons play to-morrow.

[中略]

We pass, and have our gesture; love and pain  
And hope and apprehension and regret  
Weave ordered lines into a pattern set  
Not for our pleasure, and for us in vain.  
The gesture is eternal; we who pass  
Pass on the gesture; we, who pass, pass on  
One after one into oblivion,  
As shadows dim and vanish from a glass.

私たちは影絵劇を演じる人形  
その脚本は私たちの心で編まれているのだと夢見て  
そっくりそのまま同じ役を熱心に演じる  
それは昨日、父親達が演じた役であり  
明日は息子達が同じ役を演じるのだらう。

[中略]

私たちは身振りで演じ通り過ぎていく 愛や痛みを  
期待に不安、そして後悔を  
それらは整然とした網目となり一つのパターンへ収束する  
自分たちの喜びのためでもないし、無駄なことでもない。  
身振りは永遠に続き 過ぎゆく私たちは  
身振りを伝えていく 通り過ぎ、手渡す  
次から次へと 忘却の彼方へ  
私たちの影が朧になり 映し出す硝子から消えるその時に。

シモンズは英国内で英訳が出版されるよりも前に仏語でニーチェを読んでいたと認めているものの (Symons 'Nietzsche' 9)、その永劫回帰論の元となる『ツァラトゥストラ』英訳 (1896) で用いられている「全く同じ」self-sameという言葉が、この詩でも使用されているのは偶然だろうか。我々は人生という舞台に順番に呼び出され、役割を演じた後は、舞台から降りて

忘れ去られ、また出番が来れば全く同じ役割を繰り返す。そのサイクルは未来永劫変わらないことを受け入れ、その輪の中にいる自分を眺めている詩人の姿が印象的な詩でもある。

## 5. シモンズとニーチェに共通する「絶望を抱えて生きる意志」

生きていれば時に絶望し、苦悩する瞬間から逃れることはできない。しかしその解決を、例えば特定の「神」を信じれば今よりも良くなるという希望的観測、不確実な来世を信じて委ねてしまう道を選ばずに、どのような人生であっても無限に繰り返し生き抜く、そして人生にはその価値があるという姿勢は二人に共通しているのではないか。何度も絶望しながら生き、この地上に戻ってきて、永遠に繰り返される人間の営みのサイクルを受け入れようという彼らの視線は、当事者ではない立場で他者の人生を俯瞰してみる神の視点のように尊大でもなければ、悟りの境地のような虚無でも、自暴自棄から享樂的な言動に至る能動的ニヒリズムでもない。与えられた人生をそのまま何度でも生き抜いてみせる、それは究極の人生の肯定、人生の礼賛ではないか。この視点から読み直すと、シモンズの唯一の短編小説集 *Spiritual Adventures* (1905) のタイトルと収録された小説の特徴から感じていた、内容とタイトルが奇妙に一致しない違和感も納得できるものに変わる。この小説集に収録されている話は全て、各々の気質が理由で周囲の大多数に馴染めず孤立した人物の人生や周囲との埋めがたい断絶が描き出されているのだが、フィクションと呼ぶには既視感のある人物設定であると同時に、一般的には幸福とはいえない人生が取り上げられている。それにもかかわらず、彼らの人生を辿る物語を束ねた本に「冒険」という語彙を選んだ背景に、ニーチェに共感し、その著作を熱心に読書するシモンズが見出せるのである。時に耐え難い人生であっても、その人生の舞台に参加することは大いなる冒険なのだろう。倦怠感から破滅に向かう衝動を美化するという欲望は世紀末特有の流行であることは否定できないが、シモンズはデカダンス文学の担い手の一人であると同時に、「人生の

礼賛」という信条を揺らぐことなく貫いている。

註

1 文中の日本語訳は記載がない限り全て筆者による。

引用文献

Bell, Michael. *Literature, Modernism and Myth* (Cambridge: Cambridge UP, 1997) .

Bowlby, Rachel. *Freudian Mythologies: Greek Tragedy and Modern Identity* (Oxford: Oxford UP, 2007.)

Bridgewater, Patrick. *Nietzsche in Anglosaxony* (Leicester: Leicester UP, 1972) .

Ellis, Havelock, 'Friedrich Nietzsche – I', *The Savoy*, No.2 (April 1896) , 79–94.

Markert, Lawrence. *Arthur Symons: The Critic of the Seven Arts* (Ann Arbor: U of Michigan Research P, 1988) .

Nietzsche, Friedrich, trans., M.M. Bozman, *Also sprach Zarathustra*. (1883) (*Thus Spake Zarathustra*) (Oxford: Oxford UP, 2005)

——. *Also sprach Zarathustra*. (1883) [ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った(上)(下)』氷上英廣訳、岩波文庫、1967年。]

——. *Friedrich Nietzsche: Briefe 1884–1889 / Gedichte*. [ニーチェ『ニーチェ書簡集・詩集 II』塚越敏・中島義生訳、ちくま学芸文庫、1994年。]

Schneider, Karl. 'Poets in Fin-de-siècle England: Commentary', *The Savoy*, ed. and trans. by Shoichi Watanabe, ed. by Shuji Takanashi (Tokyo: Taishukan, 1987) , p. 53–71.

Stokes, John. 'Tired of Life: Letters, Literature and the Suicide Craze', *In the Nineties* (U of Chicago P, 1989) .

Symons, Arthur. 'Nietzsche on Tragedy', *Plays, Acting and Music* (London: Constable, 1909) .

——. 'Modern Beauty', 'Images of Good and Evil', *The Collected Works of Arthur Symons*, Vol. 2 (London: Martin Secker, 1924) .

——. 'Knave of Hearts', *The Collected Works of Arthur Symons: Poems*, Vol. 3 (London: Martin Secker, 1924) .

